

「平和はどこに」

マタイによる福音書 2 章 13-23 節

ヘロデ王は、とても猜疑心が強く残忍な性格であったようです。彼は少しでも自分の地位を脅かしそうな存在は容赦なく殺害しました。そんなヘロデにとって、「ユダヤ人の王として新しく生まれた者がいる」などという知らせは、新たな脅威でしかありません。当然、ヘロデは暗殺を企てます。そこで、新しい王の居場所を突き止めようと博士たちに「見つかったら知らせるように」と命じて、ベツレヘムへと送り出したのです。けれども、彼らがヘロデ王に報告することはありませんでした。怒り狂ったヘロデは、ベツレヘムとその周辺の二歳以下の男子、つまり王として生まれたかもしれない可能性のある男の子を手当たり次第、皆殺しにしたのです。

これが救い主の誕生に伴って引き起こされた事件です。クリスマスとき、天使たちは「天には栄光、地に平和」と賛美しましたが、これのどこに平和があるのでしょうか。

クリスマスの喜びの歌声が、子どもたちを殺された母親たちの泣き叫ぶ声でかき消されていくようです。マタイは預言者エレミヤの預言を引用します。それはエレミヤ書 31 章 15 節の御言葉です。「主はこう言われる。ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから」。

ラケルは、イスラエル民族の先祖であるヤコブの妻です。つまり、ラケルはイスラエルの民の母と言っても良いでしょう。そのラケルが、バビロン捕囚のゆえに多くの民が死んでいったことを嘆きとして歌っている。そして、それと同じ嘆きがこの時に起こっているのです。

聖書は、ヘロデ王を通して、神に背を向けて生きている人間の罪という暗闇を示しています。ヘロデは己を絶対とし、自分以外を認めませんでした。ヘロデの罪と、そこから来る悲惨な行為は、あくまでも自分が王であろうとすることから生じています。このことは、ヘロデに限ったことではありません。この悲惨な出来事は、2000 年前に起こった過去の出来事だけではなく、今現在も、まさに同じことが行われているのです。パレスチナで、ウクライナで、スーダンで、シリアやイエメンでラケルの嘆きが聞こえてきます。愛する人を失った人々の悲しみと痛みが地球全体を覆いつくすようにこだましています。まさに私たちの闇の部分です。

クリスマスは、夢のようなおとぎ話でもロマンティックな昔話でもありません。クリスマスは、この悲惨な現実のただ中に、神様の救いが突入して来たという出来事なのです。聖書は、たとえそのような絶望的な世界であっても、一人のみどり子が与えられたということ語るのです。その御子を愛する者は、決して絶望することのない望みをもって生きることができる、そのことを語るのです。

エレミヤの預言はこう続きます。「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰って来る。」

けれども、マタイは、この後半部分を引用していません。なぜ記さなかったのでしょうか。おそらく敢えてそれを記さなかったのではないかと私は思います。なぜなら、神なき望みなき世界に与えられる神さまの慰めと救い、それこそが、マタイが描こうとしたイエスさまの生涯そのものだったからです。

ヘロデの幼児虐殺事件は、まさにこの世の暗闇を象徴する事件でした。この闇は、人間の罪が作り出す闇です。自分こそが王であって、それ以外のものを認めない闇です。まことの王であるイエスさまの前にひざまずこうとしない闇です。この闇は、今もこの世界を覆っています。私たちもこの闇の中で嘆き、この闇に支配されそうになってしまいます。しかし、イエスさまは闇を照らすまことの光として来られたのです。この現実の中で嘆く人たちにも希望を与え、涙をぬぐってくださる方としてイエスさまは来られた。聖書はそのことを告げているのです。

新しい年、どういう方向に進むのか私たちには分かりません。嘆き悲しみの声はあちこちから聞こえてきます。私たちが、嘆き悲しむ声をあげることもあります。しかし、それでも神さまは約束されます。「あなたの苦しみは報いられる。あなたの未来には希望がある」と。イエスさまもこう言われます。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。そのことに、希望をもって、新しい年を主と共に歩む者となることを願います。